

# 生後2～3年における児の気質・母子相互作用・児の社会的情緒的発達に関連

三宅和夫(北大心理)

## 58年度

①妊娠中より縦断的に追跡研究を行なってきた約30組の母子についての生後20カ月までの観察・実験・面接・検査を実施する\*。

②生後12カ月までのデータの分析を行い、児の初期の気質の特徴と母の児へのかかわり方がどのように12カ月時の児の母への愛着形式にかかわっているかを検討する\*。

③別のサンプルによって新生児期における泣きの特徴、特に泣きの表出の個体差をとらえ、それが児の arousal regulation の能力としてみたとき母親にどのような影響を及ぼし、また母親の応答性が児の泣きの特徴にどのように影響するのかを検討するためのデータ収集を始める。

\*①②については先行研究で20数組の母子についての検討を予備的に行っているため、これと併せよにすることのできる部分は約50組について扱えるので、一歩進んだ統計処理も可能である。

## 59年度

①前年度の約30組の母子についての追跡を生後32カ月まで行う。

②生後24カ月までのデータの分析を行い、生後12カ月時における児の母への愛着形成のタイプと、それ以後における児の社会的・情緒的発達との関係を検討する\*。

③新生児期の泣きについての研究をさらに継続し、生後3カ月における母子の相互影響を検討する。

④プラゼルトン新生児行動評価と児の生後3～12カ月における行動傾向、母子の相互作用のタイプとの関連を検討する。

\*②については先行研究で扱った20数組の母子のデータとこみにして処理することが可能であり、サンプルの減少を考慮しても40組以上は確保できよう。

## 60年度

①生後32カ月までのすべてのデータの分析を行い、生後12カ月時における児の母への愛着形成の

型を中心として、その先行要因と考えられる児の気質の特徴・母児の相互作用の特徴、後続変数としての児の社会的・情緒的発達、母児の関係の特徴を全体的に扱ってその間における諸変数の関係を明らかにしていく。

②昭和55～57年において実施された先行研究のデータと今回のデータとをあわせて、さらに児の生後2～3年間における母子相互作用の安定性・変動性について因果的検討を試みたい。

③できれば、以上のことによって明らかになると考えられる発達過程の中にみられる問題を少数の high risk pregnancy のケースについて生後1年間の追跡を行ないたい。

## 昭和58年度研究経過報告

昭和57年4～6月に出生した児30例とその母親について、本年度当初(4～7月)において、いわゆる Ainsworth Strange Situation Procedure を用いて児の母親に対するアタッチメントが安定しているかどうかについて検討した。本年度における主要な仕事はこれとともに前年度収集された諸資料(新生児期より生後11カ月にわたる間にくりかえして行われた児の気質の特徴に関するもの、母子相互作用に関するもの、母親の育児意識・態度に関するものなど)を分析することであった。それぞれの時期に収集された個別の資料についての分析はようやくほとんど行われたが、これらの相互関連ならびにそれと前記のアタッチメントの安定・不安定との関係についての検討は、次年度に実施することとなった。55～57年度研究とくらべて本研究の特色は、母子相互作用を家庭において長時間にわたり観察記録したことであり、これによって前研究において思い出された出生時よりの児の気質の一貫性と、アタッチメントとの関係のメカニズムをよりよく解釈することができるようになることが期待される。

なお、これとは別に新生児初期の泣きの特徴と

生後2～3カ月における母子相互作用ならびに児の情動反応の特徴について明らかにするための予備的試行を数例について行ったが、本試行は59年度に実施される。